

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本小児看護学会誌 (2001.02) 10巻1号:31～36.

小児看護の今後10年間の展望に関する調査

松浦和代、濱中喜代

## 報告

# 小児看護の今後10年間の展望に関する調査

松浦和代\*<sup>1</sup> 濱中喜代\*<sup>2</sup>

### I. はじめに

将来における子どもの健康上の問題点を明らかにし小児看護の研究の優先課題を決定するという取り組みは、Schmidt ら(1997)<sup>1)</sup>、Broome ら(1996)<sup>2)</sup>、Hinds ら(1992)<sup>3)</sup>の報告や、米国の Healthy People Program の解説<sup>4)</sup>にその例を見いだすことができる。わが国においても、地域のニーズや医療改革を視野におき、将来の小児科外来医療を具体的に展望した論文を見いだすことができる(徳丸、1998)<sup>5)</sup>。こうした論文は、10年を1区切りとして現状の問題点や優先課題の明確化を試みているが、そうすることによって、行動目標がより現実的に示されている。

さて、21世紀の到来を契機に、着実に加速する少子社会の将来をみつめ、小児看護の専門性と方向性を展望し効率的に問題の解決を図ることは、極めて重要と思われる。我々は、小児看護が取り組むべき今後の課題を明らかにし、臨床看護・看護教育・看護研究の実践的な指針を得たいと考えた。本研究の目的は、今後10年間に小児看護において優先されるべき課題を収集し、明確化することである。

### II. 研究方法

#### 1. 対象者

対象は、小児看護領域ならびに関連領域でリーダーシップを発揮する有識者27名とした。

#### 2. 調査方法

方法は、郵送法によるアンケート調査とした。調査票は、今後10年間にわが国において、①子どもの健康生活上解決しなければならない問題、②子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革、③子どもと家族の看護に影響を与え

る要因、④小児看護の研究課題、の4領域より構成した。②については内容をさらに、a. ヘルスプロモーション、b. 救命・救急および周手術期、c. 慢性疾患・予後不良疾患、d. 小児看護援助、の4小領域に分けた。

回答形式は自由記述法とし、各設問毎に優先度が高いと思われる項目を3項目まで箇条書きとすることを依頼した。ただし、医療職者以外に対する②と④の質問は、意見があれば述べてもらう程度にとどめた。

小児看護職者4名を対象に、パイロットスタディを実施し、調査票を完成した。

調査期間は平成12年1月~2月とした。

対象者へは、依頼文を添えた調査票の送付後、電話によって調査協力への同意を確認することとした。

#### 3. 分析方法

回答の分析は、看護系大学の小児看護学担当教官3名でKJ法に基づいて行うこととした。手順は、全回答をカード化し、3者で内容の類似性について話し合い、グルーピングを行うこととした。

また全回答の記述から、主要な用語の使用頻度を単純集計により求めることとした。

### III. 結果

回収数は19で、回収率は70.4%であった。回収された全数を分析対象とした(有効回答率100%)。

対象者の内訳を表1に示した。小児専門病院看護部長が3名、看護系大学小児看護学現・元教授が6名であった。小児科医は5名で、このうち3名は医学部小児科学現・元教授、2名は国際的な視野に立って活躍中の臨床医である。

\*<sup>1</sup>旭川医科大学医学部看護学科 \*<sup>2</sup>東京慈恵会医科大学医学部看護学科

子どもの人権擁護に関わる団体の代表者は1名であった。教育学者2名、社会学者1名および社会福祉学者1名は、学校教育、子どもの福祉やQOLについて社会的な発言を行っている方々である。

表1 対象者の内訳 (n=19)

対象者	人数
小児専門病院看護部長	3
看護系大学小児看護学教授(現・元)	6
小児科医	5
子どもの人権擁護に関わる団体の代表者	1
教育学者	2
社会学者	1
社会福祉学者	1

1. 子どもの健康生活上解決しなければならない問題(図1)

上位の項目は、「生活習慣病の若年化と食生活」が9名、「心の問題」が7名であった。次いで「人間関係の希薄化」が5名であり、子どもの成長発達に不可欠な人間関係の不足、心豊かな遊び体験や人との交流の不十分さなどが指摘された。「虐待・被虐待」が4名、「母性・父性の不在と育成」「思春期の健康問題と非行」

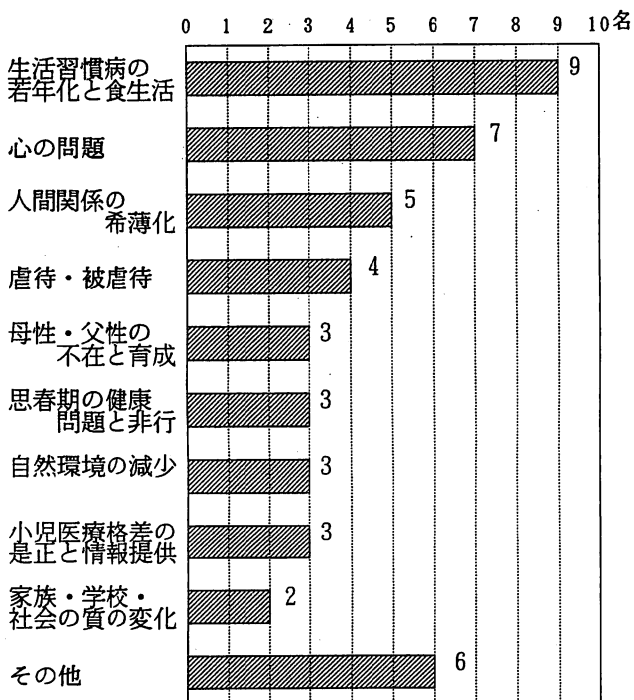


図1 子どもの健康生活上解決しなければならない問題(重複回答)

「自然環境の破壊や減少」「小児医療格差の是正と情報提供」が各3名であった。「家族・学校・社会の質の変化」が2名であった。その他、「養育環境の質的低下」「基本的生活力の低下」「すこやかさ感や健康感覚の喪失」「自然との共存」が各1名より挙げられた。

2. 子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革

1) ヘルスプロモーション(図2)

「地域での育児支援」が11名で最も多く、内容としては育児サポートシステムの確立、母親支援、共働き家族への育児支援、病弱児・難病児をもつ親支援や子育ての社会化などの記述がみられた。「生活習慣病の予防」6名、「健康教育内容の強化」5名、「学校教育への看護職の配置」「家族カウンセリング」が各3名であった。家族カウンセリングに関しては、今後10年間のゲノム・プロジェクトの成果への対応が強調された。「子どもの病気・病後の有給休暇制度の検討」「薬物・喫煙・アルコール」が各2名であった。その他、「親の離婚に関連する子どもの問題」「虐待・被虐待」「事故防止教育」「外来での育児・療育指導の拡大」「初期育児不安に対するシステムの確立」「疾病や障害に対する考え方」が各1名であった。

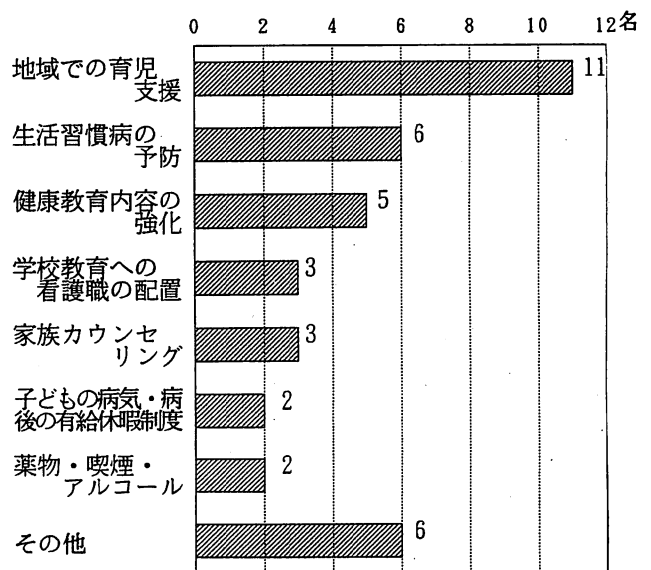


図2 子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革—ヘルスプロモーション—(重複回答)

## 2) 救命・救急、周手術期 (図3)

「救命・救急体制の整備」が7名で最も多かった。その内容としては、救急ネットワークの整備、後方ベッドの整備と増床、外来手術部や24時間小児救急サービスの確保など、具体的な指摘が含まれた。次に「手術侵襲を最小限にとどめるケア」が4名、「親のためのサポート設備の整備」「インフォームドコンセント」が各3名、「苦痛の軽減」「術後の長期フォローアップ」が各2名であった。その他、「小児臓器移植医療」「妊娠中絶と生命倫理」「診療報酬の適正化」「医療技術・ケア水準の向上」「小児救急看護者の育成」が各1名であった。

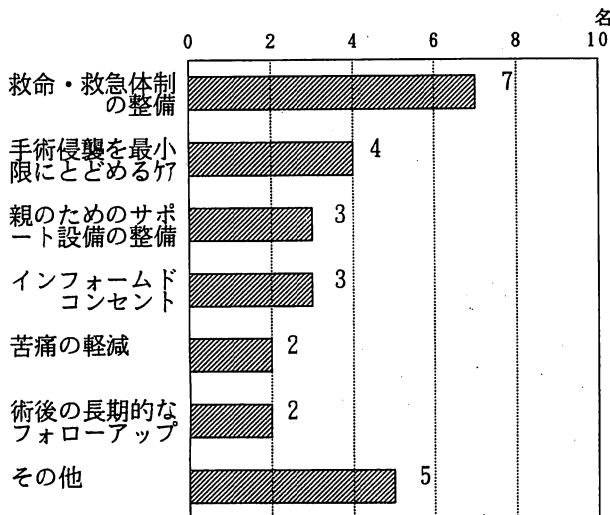


図3 子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革—救命・救急、周手術期—  
(重複回答)

## 3) 慢性疾患・予後不良疾患 (図4)

最も多かった回答は「病棟看護の充実」10名であり、入院環境を子どもの視点で豊かにすることや入院中のQOL向上を図ることが挙げられた。次いで「在宅看護の充実」6名、「インフォームドコンセント」5名、「外来看護の充実」「学校・地域への健康教育や介入」「がん看護」が各4名、「死の準備教育」が2名であった。その他として「病後の長期的なフォローアップ」「子どもの自律の尊重」「ノーマライゼーション」「外来診療日や時間の拡大」「小児難病の支援」「遺伝相談」が各1名であった。

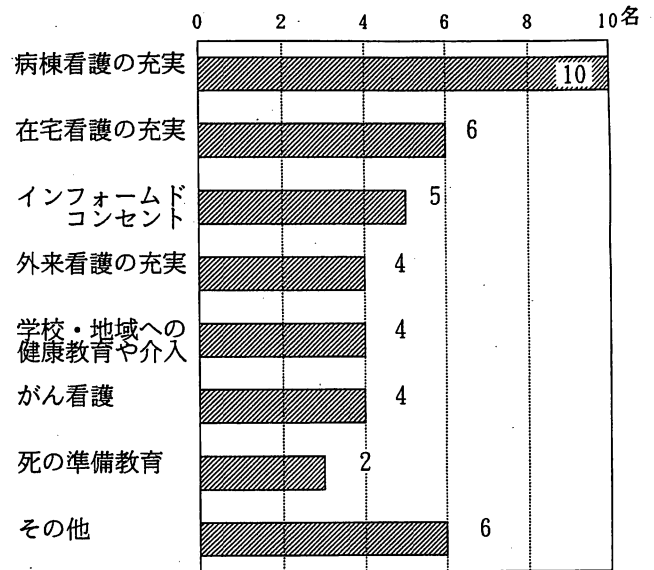


図4 子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革—慢性疾患・予後不良疾患—  
(重複回答)

## 4) 小児看護援助 (図5)

「役割拡大」6名、「小児専門看護師の育成」「家族支援方法の検討」「入院生活の援助」が各5名、「小児看護技術の向上と熟練」4名、「対象理解の方法」3名であった。その他「小児医療の継続性と看護の連携」「インフォームドコンセント」「消費者ニーズの把握」「子どもの心を理解し代弁できる技術」が各1名であった。

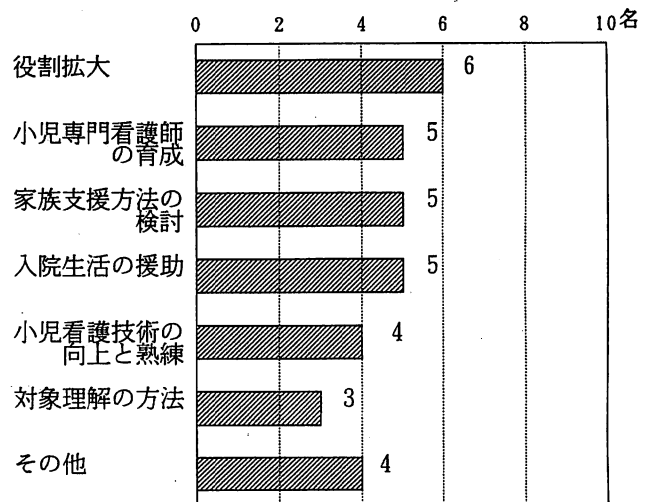


図5 子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革—小児看護援助—  
(重複回答)

### 3. 子どもと家族の看護に影響を与える要因

(図6)

最も懸念される要因は「経済的要因」8名であり、国家財政難や小児診療報酬の見直しの継続について述べられた。「家族の質的变化」6名、「少子高齢化」「社会支援体制のあり方」「看護教育内容と看護者の資質の変化」が各5名、「医療に対する社会認識の変化」4名、「子ども観や子どもの人権に対する社会認識の変化」「保健医療体制の実際的な変化」2名であった。その他、「子どもらしさ・学校らしさといった社会通念の揺らぎ」「医療情報の氾濫」「在宅看護の変化」が各1名であった。

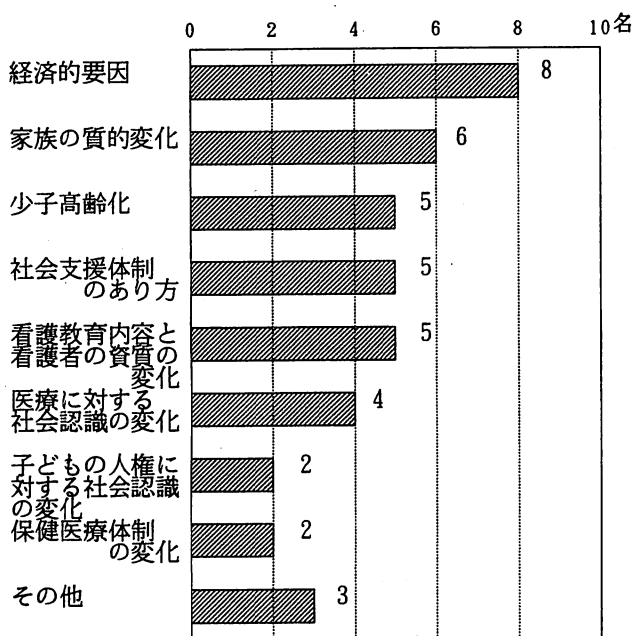


図6 子どもと家族の看護に影響を与える要因 (重複回答)

### 4. 小児看護の研究課題 (図7)

最も多く挙げられた項目は「臨床で直面している問題の解決/より臨床的なテーマ」10名であった。その具体的な内容として、化学療法中の苦痛の軽減、慢性疾患患児の自立、セルフケア能力の育成、低出生体重児や障害児のケア、小児難病の長期的ケア、ありふれた疾病体験が子どもにもたらす影響、ターミナル・ケア、インフォームドコンセント、虐待、様々な家族形態と病児の看護、の記述がみられた。

次いで多かった項目は「ケアの評価方法に関

する検討」5名であり、経済性評価、医療に対する親の満足度や看護必要度の査定が挙げられた。「育児ストレスと支援」が5名、「思春期の理解と援助の方向づけ」「EBNのための看護実践効果の検証」が各4名、「看護研究の方法論の検討」「心のケア」が各2名であった。その他、「子ども学という考え方に基づく検討」「成育医療における生活ニーズへの対応」「小児精神病看護」「不慮の事故の予防対策」「医療事故防止対策」「喫煙・薬物・性逸脱などの回避策」「遺伝相談の技法」「QOL研究」が各1名であった。

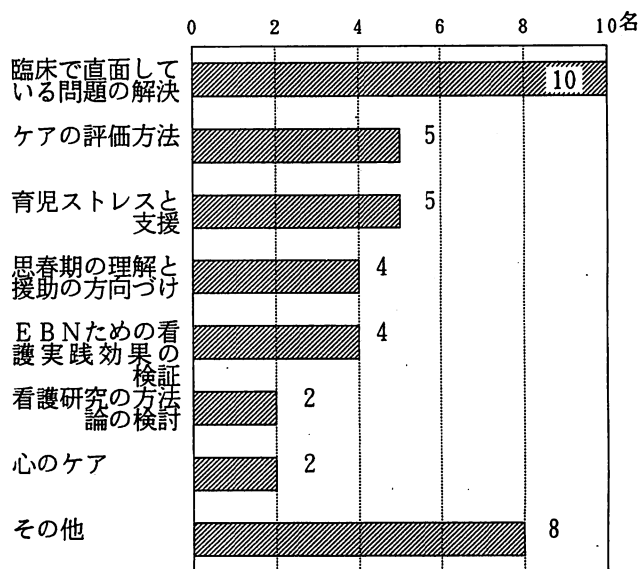


図7 小児看護の研究課題 (重複回答)

### 5. キーワード (表2)

全回答において10回以上使用された用語は9語あり、それらをキーワードとして表2に示した。「子ども」「小児看護」も多く使用されたが、本集計には含めなかった。

「親・家族」が最も多く、「育児」がこれに続いた。この他、「生活習慣病」「病棟看護」「経済的要因」「学校教育」「心の問題」「インフォームドコンセント」「思春期」も使用頻度が高かった。

表2 キーワード

キーワード	使用頻度
親・家族	27
育児	18
生活習慣病	15
病棟看護	15
経済的要因・経済性	14
学校教育	12
心の問題・心のケア	10
インフォームドコンセント	10
思春期	10

#### IV. 考 察

子どもの健康生活上解決しなければならない問題を総括すると、生活習慣病の若年化と心の問題が上位であった。一方、人間関係の希薄化、母性・父性の不在、虐待・被虐待など表現はやや異なるものの、これらを子育てをめぐる最近の社会現象として集約し直せば、より深刻な問題群を見出すことができる。

子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革として、ヘルスプロモーションの検討課題には、地域での育児支援活動が最優先に挙げられており、先の認識に連動する結果となった。この課題は、小児看護に対する強い社会的ニーズでもある。少子化問題と子育てを主題とした平成10年度の厚生白書は、地域構造の変化に伴って子育ての責任が母親に集中していること、子どもとの接触体験がないまま親になるものが増えていることや、専業主婦に育児不安傾向が高いことなどを指摘している<sup>9)</sup>。こうした状況の改善に向けて、今後10年間の育児支援活動はその具体的な成果が求められる。

もう1点、ヘルスプロモーションの課題として力点が示されたのは学校教育への参画である。生活習慣病の予防対策、健康教育内容の強化や学校教育への看護職者の配置など、学童期・思春期の健康管理の現状に対する危機感が示された。看護と学校教育の効果的な連携のあり方について、今後検討が求められるであろう。

臨床の検討課題として、救命・救急や周手術期では、体制・設備の整備と具体的な臨床ケアの検討に課題が二分された。体制・設備の整備

については他領域ではほとんどみられず、小児救急医療システムの遅れに対する指摘と考えられる。

慢性疾患・予後不良疾患に関しては、病棟看護だけでなく、広く外来・在宅・学校や地域の看護にも関心が示された。医療体制の在宅へのシフト化に伴って、患児の生活や活動する「場」に応じた支援の充実が課題とされていると解釈できる。

小児看護援助では、役割拡大や専門性の向上が期待され、最も具体的な課題は小児専門看護師の育成であった。平成10・11年度に専門看護師教育課程の認定を受けた大学院は6校であり、このうち3校が専門看護分野として小児看護を有する<sup>7)</sup>。教育課程のスタートと共に、臨床からの雇用ニーズがどれほど伸びていくか、どれほどの実績や成果が示されるか、どのような職位や部門での採用が一般化するかなどについても関心の集まる場所である。小児専門看護師の育成に関する今後10年間の教育評価は非常に重要となる。

次に、子どもと家族の看護に影響を与える要因としては経済的要因が最も強く認識されており、その関連要因として社会支援のあり方や保健医療体制の変化などへの危惧が示されたと考えられる。現在、小児診療部門の非採算性や小児科閉鎖数の増加傾向<sup>8)</sup>は深刻な問題であり、小児看護部門が今後どのような戦略で採算ベースに転ずる努力を行うかが、厳しく問われるものと思われる。

さらに研究課題としては、臨床看護の問題解決に寄与するテーマに高い関心が示された。Rivara ら<sup>9)</sup>は、臨床での確かな研究テーマを見出すための視点として、①その問題の頻度が高いこと、②重症度が高いこと、③何らかの解決方法があること、を挙げている。こうした示唆を含め、効率的な問題解決につながる臨床研究が期待される。また以上の取り組みに一元化する動きとして、EBNの確立や評価方法の検討の必要性が示されたと解釈できる。

最後に、9つのキーワードからも、今後の課題を再確認できる。9語中7語は4領域のいず

れかで上位に挙げられ、その領域の課題を表象している。「インフォームドコンセント」と「思春期」は領域毎の上位とならなかったが、総合的にみると使用頻度が高く、領域を問わず重視されていることが把握された。

## V. 結論

本結果から示されたわが国の小児看護における今後10年間の優先課題は、以下の通りである。

- 1) 子どもの健康生活上解決しなければならない問題としては、生活習慣病の低年齢化、心臓の問題および育児をめぐる社会現象、が上位に挙げられた。
- 2) 子どもと家族の看護に求められる具体的な検討や変革として、育児支援・生活習慣病の予防・学校教育への参画、救命・救急体制の整備、患児の生活の「場」に応じた支援、小児看護の役割拡大や専門看護師の育成、が上位であった。
- 3) 子どもと家族の看護に影響を与える要因では、経済的要因が強く懸念されている。
- 4) 小児看護の研究課題は、臨床で直面している問題の解決が優先されている。

(本研究の要旨は第10回日本小児看護学会において発表した)

## 引用文献

- 1) Schmidt, K., et al.: Determining research priorities in pediatric nursing : Delphi study, *Journal of Pediatric Nursing*, 12 (4), 201-207, 1997.
- 2) Broome, M. E., Woodring, B., O' Connor-Von, S.: Research priorities for the nursing of children and their families : Delphi study, *Journal of Pediatric Nursing*, 12(4), 201-207, 1996.
- 3) Hinds, P. S., et al.: The 1992 APON Delphi study, to establish research priorities for pediatric oncology nursing, *Journal of Pediatric Oncology Nursing*, 11(1), 20-27, 1994.

- 4) Velsor-Friedrich, B.: Healthy People 2000/2010 : Health Appraisal of the Nation and Future Objectives, *Journal of Pediatric Nursing*, 15(1), 47-48, 2000.
- 5) 徳丸実: [I] これからの小児科外来医療の展望、*小児科診療*、51、1213-1218、1998.
- 6) 厚生省/監修: 厚生白書(平成10年度版) 82-87、ぎょうせい、1998.
- 7) 南裕子編: 平成11年度専門看護師教育課程認定結果、協会ニュース、397、7、日本看護協会、2000.
- 8) 厚生省大臣官房統計情報部編: 平成10年度医療施設調査・病院報告、上巻(全国編)、厚生統計協会、2000.
- 9) Rivara, F. P., 山中龍宏: [II] これからの小児科外来医療の展望、*小児科診療*、51、1213-1218、1998.